

外語会海外ツアー報告

モンゴルほろ酔い旅行

田中 功 (M昭37)

モンゴルは今年は絶対に行かねばならない目的地であった。なぜなら我がモンゴル語科同窓の花田磨子さん(昭38)が昨年10月に特命全権大使としてウランバートルに赴任されていたからである。7月9日、東京外語会海外ツアー参加者32名はうち揃って大使館公邸を訪問した。私はといえばその前夜、三五会のK先輩から花田君に是非飲ませたいとお預りした土産、大阪市泉野の銘酒「篋(たかむら)」の生冷酒を、飛行場から大使館に直行して冷蔵庫に納めていただきほっとしていた。会場の公邸には地元外語会の面々14名が待ち構えておられ、日本から憧れの大草原に降り立った我々と合わせて46名、実に豪華盛大なウランバートル支部結成の場となった。花田ご夫妻、モンゴル在住の東京・大阪外語のみなさんとの和やかな交流がはじまり、美しく整った公邸宴会場で心尽くしの美味しい料理を味わった。宴たけなわに出された樹木の香のする生冷酒「篋」のグラスで改めて乾杯、東京・大阪合同支部の発足を祝った。

翌10日は首都郊外で乗馬を楽しみ、7月11日はいよいよ旅のクライマックス、ウランバートルの国立スタジアムに移る。民族の夏の大祭典「ナーダム」のメイン会場である。沸き立つ白い積乱雲の下、1万数千の大観衆が集まっている。我が外語会メンバーは遅れて入ったため日射しの厳しい座席に陣取った。モンゴルの儀式に則って「天と地に地酒アルヒを薬指で散らし」少しだけ回し飲みして、待機する。大太鼓が響き渡る。これこそチンギス汗の凱旋進軍のリズムだ。軍楽隊が勇ましくも哀調を帯びたモンゴル国歌

を奏で、スタンドは総勢起立。小柄なバガバンデイ大統領が民族衣装で開会を宣言すると、地方予選を勝ち抜いた516名の逞しい力士が鷹の舞いを舞いつつ入場、儀仗兵が四隅を守る「汗」の軍旗を一回りして待機所に戻る。弓道選手は老若男女入り交じっての整列。赤青の制服が映える騎馬兵軍団は磨きのかかった揃いの鹿毛で場内を胸を反らして一周する。馬頭琴、ホーミー、モンゴル追分の演奏、そして青空の雲の中からパラシュート部隊の降下と、矢継ぎ早の演出も心憎い！早くも相撲の取り組みが草の上のそこかしこで始まった。日射しはかなり強いが木陰は空気中の湿度が低いのでさほど苦しくない。午後は弓と競馬だ！喉が渇くぞ！皆さんしっかりと水を買って込んで会場へと散った。

メンバーの一部はオペラ「オチルテイゴルバントルゴイ」(D. ナツアグドルジ作)を観にオペラ劇場へ。ここは日本の兵士が極寒のなか建設したといういわれもあって、二重の感激にひたった。

12日からは南ゴビと西のカラコルムの二手に分かれて草原の旅に出た。ゲルに住む牧民から馬乳酒を頂く。羊を実に厳かに潰して石焼きにする工程を見学し、焼き肉をたらふく食べる。南に行ったグループは鷹の谷で万年雪の水源を歩き馬で帰った。西のグループはエルデンゾーのラマ寺院を探索した。水彩画を描く人、写真を撮る人。熱暑汗だくの南組と涼しい冷房バスの西組ともに夜は満天の星空を満喫して首都に戻った。7月16日、大自然を体いっぱい吸い込んで、一人の落伍者もなく帰国の途についた。



地元メンバーと合わせて46名の大会